

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 17 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520292

研究課題名（和文） サミュエル・ベケットの間文化的研究

研究課題名（英文） Intercultural studies of Samuel Beckett

研究代表者

メヴェル ヤン(MEVEL YANN)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：90431486

研究成果の概要（和文）：本プロジェクトは、日本において、サミュエル・ベケットのフランス語による作品を、フランス語、フランス文化、フランス文学批評、文学理論とともに広く紹介した。研究代表者が企画運営したフランス語によるベケットセミナーは、日本におけるフランス語系ベケット研究に新たな可能性を示しただけでなく、日本のフランス文学研究者とフランスやフランス語圏諸国のベケット研究の専門家たちとの情報・意見交換を実現し、また、若手ベケット研究者たちに研究発表の機会を提供した。

研究成果の概要（英文）：We promoted, in Japan, French language and culture, French literature, criticism and theory, in particular the work by Samuel Beckett in French. At the same time, organizing a Beckett seminar in French was a way to stimulate in Japan new research in French literature about Samuel Beckett and exchanges between French / Francophone Beckett specialists and Japanese researchers in French literature. We helped young Japanese researchers interested in Beckett's work to enlarge their experience and knowledge.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：仏文学・ベケット・間文化的研究

## 1. 研究開始当初の背景

1989年の作家没後以降、世界のベケット研究の進展は著しいが、中でも、近年のベケット研究において特に目覚ましい成果を挙げている手法が受容論的・間文化論的なアプローチである。その代表的な成果が、フランスのベケット受容におけるブランシヨ的な読解の覇権を再検討した Bruno Clément の研究 *L'Œuvre sans qualités. Rhétorique de Samuel Beckett* (Seuil, coll. Poétique, 1994) に他ならない。クレマンによれば、

ブランシヨ的あるいはニヒリスト的な読解は長い間フランス系ベケット研究に特徴的なものであったが、それと対立する形で、アングロサクソン系ベケット研究は長い間ヒューマニズム的な読解を特徴としてきたという。こうした読解パターンの差異に注目して、各国におけるベケット受容のあり方を再検討する試みは、間文化的な観点から今後のベケット研究に貢献するうえで非常に意義深いテーマである。ウィリアム・マルクスも正しく指摘しているように、ベケット作品の受容

はすべての国々で同じ形式を持っているわけではない(William Marx, *L'Adieu à la littérature. Histoire d'une dévalorisation, XVIII<sup>e</sup>-XX<sup>e</sup> siècles*, Minuit, 2005)。例えば、ベケット没後、フランスでは、いくつかの重要なテキスト(*Bande et Sarabande, Eleutheria, Les Os d'Echo*)が出版され、それらに関する研究が活発化しているにもかかわらず、アメリカや日本においては、おそらくは翻訳をめぐる状況の違いのせいなのか、必ずしも十分な研究評価がなされているとは言い難い。こうした研究上の落差は、英語系の研究とフランス語系の研究の分断化の傾向をその一因としているだろう。各国におけるベケット研究の横のつながりと一層の交流が急務となっている所以である。これまで一貫してベケット研究に従事してきた研究代表者は、ベケットをめぐる国際研究集会の共同開催責任者を過去三回(1999年レンヌ大学、2003年ウェスタン・シドニー大学、2005年スリジー・ラ・サル)務めるなど、世界のベケット研究の事情に精通していることに加え、2003年秋からは日本の東北大学で研究教育に従事しており、日本のベケット研究界の状況にも通じていることから、この数年来、日欧米のベケット研究の間文化的な総括の試みに強い関心を抱いてきた。とりわけ、英語中心主義への懸念から、フランス語系ベケット研究の日本における組織化と、英語系研究との一層の交流の推進の必要性を痛感し、間文化的な観点を基盤とした本研究を着想するに至った次第である。

## 2. 研究の目的

本プロジェクトは、没後二十年間におけるサミュエル・ベケット(1906-1989)研究の成果を、間文化的な観点から総括する試みである。「間文化的[異文化間的]interculturel」という語を用いたのは、本研究が、主として日欧米におけるベケット研究の批評的な総括と各国における受容の特徴を明らかにすることを目指しているばかりでなく、フランス語、英語、日本語によるベケット研究において、ややもすると形成されがちな、異言語間=異文化間の研究の分断化の傾向に対して、実質的な橋渡しの役割を果たすことを目指しているからである。すなわち、過去二十年間のベケット研究を総括すると同時に、日本におけるフランス語系ベケット研究と英語系ベケット研究の相互浸透をこれまで以上に促進し、新たな研究ネットワークを構築することが本研究の基本的な目的となっている。間文化的ベケット研究の具体的な内容としては、まず、主として研究代表者がこれまでに集めていない日欧米の研究文献の収集を行うことが挙げられる。出来る限り網羅的な資料収集を心がけ、ベケット文献のアーカイブを構築することを目指したい。文献収集は段階的かつ体系的に行い、特に、最初の二年間で、主要な文献は確実に収集するように計画的な調査と発注を行う必要があるだろう。次に、

これが中心的な課題であるが、一年に二度の割合で、東北大学においてセミナーを開催し、人的ネットワークの構築と着実な研究成果の獲得を図る。セミナーは、主としてフランス語系ベケット研究者を集める形になるが、英語系ベケット研究者を排除するものではなく、現在、英語系ベケット研究者を中心として年二回開催されている日本ベケット研究会(Samuel Beckett Research Circle of Japan)の活動を相互補完的に支えるものとなるはずである。具体的には、延べ十五名程の研究者による発表機会を作り、博士論文を準備している若手研究者のみならず、既に実績のある有力な研究者の発表の機会をも確保する一方、欧米の著名なベケット研究者の招聘も行う。こうした発表や講演などの中で特に重要で意義深い仕事と判断されたものは、ライデン大学教授のSjef Houppermansが主宰するベケット研究専門誌 *Samuel Beckett Today/Aujourd'hui* (Rodopi, Amsterdam/New York)への掲載の道を確保する。その他、ミナール社のヌーヴォー・ロマン研究シリーズを統括しているJohan Faerber(Université Paris-Sorbonne Nouvelle)とも協力する。文献資料の体系的な収集によるアーカイブの構築と、過去二十年間の日欧米のベケット研究の総括を目指す東北大学ベケット研究セミナーの定期的開催による集団的な研究成果の蓄積とその刊行が、研究期間内に達成すべき作業内容となるはずである。研究代表者の個人研究であると同時にセミナー参加者による集団的な研究でもあり、また、日欧米の研究者が各自の問題意識を鮮明にしながらか参加する間文化的で学際的な研究でもある本研究は、ベケット没後二十年を経て、グローバリゼーションの進む世界におけるベケット研究の新たな形を提示するひとつのモデル研究となるだろう。間文化的ベケット研究は、第一に、英語系の研究とフランス語系の研究の二つの研究領域双方への総括的な目配りを可能とするはずである。もちろん、本研究が、フランス文学研究の一環である以上、後者に重点が置かれることは当然ではあるが、具体的な着眼点としては、以下のような個別のアプローチを英語系の研究と共有している。すなわち、生成論、詩学、文体論(翻訳の問題を含む)、テーマ論(精神分析を含む)、文学史・文化史、間テキスト性あるいは他の諸芸術との関連性、ドラマトゥルギー(作劇法)・演出法、映画分析などである。いずれもベケット研究の方法論としては手堅い古典的なアプローチであるが、本研究を通じて、これらのアプローチ毎に英語系の研究文献とフランス語系の研究文献を網羅したビブリオグラフィを作成することに加えて、セミナー参加者のそれぞれ得意とするアプローチによる具体的な研究をケーススタディとして提示することができるならば、二つの言語の枠組みを超える形で、「ベケット研究の現在」のパノラマを提示する試みとしても、また、「ベケット研究の未来」の方向性を示唆する試み

としても、世界的に意義深いものとなるだろう。本研究が目指す現状総括(パノラマ的概観)の試みは、例えば、デュラス研究において既に成されている同様の試み(*Ecrire, réécrire : bilan critique de l'œuvre de Marguerite Duras, sous la direction de Bernard Alazet, Minard, 2002*)のうちに、ひとつのモデルケースを見ることができるだろう。

間文化的ベケット研究は、第二に、受容論や影響関係の研究に大きな進展をもたらすことができるはずである。受容論でいえば、中等教育におけるベケット像は今なお「不条理の作家」というものだが、こうした紋切型のイメージがメディアを通して大衆のうちに定着されていくメカニズムがどのようになっているかという研究も、本研究の射程に入る。また、影響関係という点でいえば、本研究は、ベケット作品が現代フランス文学にどのような影響を及ぼしているか(例えば Editions de Minuit の新世代の現代作家たちにおけるベケット受容はどのようになっているか)といった問題—このような問題関心は英語系ベケット研究の観点だけでは出てこないはずである—や、日本におけるベケット受容(一般読者レベルの受容から日本の作家・劇作家・批評家における受容まで)が、例えば、デュラスやビュートルといった作家たちの受容と比べて、どのように違っているのか、といった問題をも扱うことができる。

日本におけるフランス語系ベケット研究を集团的に活発化する活動を通して、これまで、ややもすると英語系ベケット研究に偏る傾きがなきにしもあらずであったベケット研究に対して、ありうべきバランスを取り戻し、しかも、英語系ベケット研究の豊かな蓄積を排除することなく、英語系とフランス語系両者間の望ましい協力関係を日本の地において構築するための一歩を本研究が踏み出すことができれば、これに勝るものはない。

### 3. 研究の方法

初年度は、基盤的な文献資料の収集を進める傍ら、日本のベケット研究をリードする主要メンバーと研究打合せの機会を設け、フランス語系と英語系の研究を取り混ぜたセミナーのプログラムを構成し、年二回のセミナー開催を実行する。英語系の研究者としては、まず、ベケット自身の作品だけでなく、ジェイムズ・ノウルソンによる伝記的研究の一部についても翻訳を刊行している東京大学の田尻芳樹氏との研究打合せを行う。田尻氏とは、2005年夏のスリジー・ラ・サル国際文化センターにおけるコロック「サミュエル・ベケットの存在」の折に共同研究を行った経験があり、今回のプロジェクトについても持続的な助力を得ることができるだろう。そして、もう一人、演劇研究と映画研究の分野の専門家であり、博士論文準備学生向けにベケットに関するセミナーを定期的に主宰している早稲田大学の岡室美奈子氏との研究打合せを行う。岡室氏とは、ダブリ

ンのトリニティ・カレッジにおける国際ベケット演劇ワークショップに共同参加した経験があり、本研究のプログラム作成とセミナー実施の詳細について有効な助言を得ることができるだろう。他方、フランス語系の研究協力者としては、ベケット研究を専門とする筑波大学の吉野修氏と学習院大学の太野麻奈子氏と研究打合せを行う。2005年夏のスリジーでのコロックの折に意見交換を行った太野氏は、フランスで博士論文を提出しており、セミナーの多様なテーマの設定において、有効なヒントを与えてくれるはずである。東北大学ベケット研究セミナーの内実については、三つの柱を考えている。一つ目は批評的総括であり、二つ目は受容論(各国におけるベケット受容)、三つ目は影響関係(特に現代作家に与えた影響についての考察)である。毎回のセミナーにおいては、以上三つのグループについて、それぞれ少なくともひとつの発表を行うかたちとし、これらに付け加えて、著名な外国人研究者をゲストとして招聘して、講演を行ってもらい、というスタイルを考えている。

研究代表者と面識があり、日本のベケット研究者に対しても有効な刺激をもたらすと思われる研究者としては、例えば、レンヌ第二大学名誉教授のミシェル・トゥーレ氏、パリ第八大学教授のブリュノ・クレマン氏(氏はベケットのレトリックと哲学的側面についての専門家である)、パリ第七大学教授のエヴリヌ・グロスマン氏(氏は精神分析的側面に詳しい専門家である)、そして、特に現代作家におけるベケットの影響に詳しい二人の研究者、ボルドー第三大学教授のドミニク・ラバテ氏とレンヌ第二大学教授のブルーノ・ブランクマン氏らがいる。一方、英国のレディング大学に本拠を置く Beckett International Foundation の主要な責任者であるジェイムズ・ノウルソン氏とマリー・プライデン氏(共にフランス文学が専門であり、ベケット研究の第一人者である)の二人とコンタクトを取ることは本研究の遂行のうえで絶対に必要である。というのも、同機関にはベケット研究資料センターがあり、肉筆原稿(マニユスクリ)や書簡類、ドキュメント類(批評研究、ビデオ、イコノグラフィ等)が収蔵されており、本研究の柱である批評的総括と受容論の研究を進めるうえで必須の資料にアクセスすることが可能だからである。全員を日本に招聘することは困難としても、少なくとも研究代表者がフランスや英国に赴き、これらの専門家との緊密な研究打合せを行うことは、間文化的ベケット研究の推進のために不可欠である。これらの研究者以外にも、本研究の趣旨に賛同し、様々な形での協力を示してくれるに違いない研究者として、アメリカ・ベケット協会の理事であるメリーランド大学教授のアンジェラ・ムーアジャニ氏、ベケットの友人でもあったニューヨーク大学教授のトム・ビショップ氏(両氏は英語系でもフランス語系でも共にベケット批評の長いキャリアを持っている)、そして、アイルランド・ダブリン大学教授のブリジ

ット・ル・ジェズ氏らがいる。ル・ジェズ氏は、ベケットがトリニティ・カレッジで行ったフランス文学の講義についての研究を最近出版したばかりであり、間文化的ベケット研究の観点から非常に興味深い仕事を行っている人物である。なお、資料調査という点では、レディング大学のベケット研究資料センターと並んで、フランス国立図書館のベケット文庫も重要なアーカイヴである(資料センターとしては両者は相互補完的な関係にある)。

以上、初年度の研究計画をまとめるならば、ベケット研究資料センター(英国・レディング大学)およびフランス国立図書館(パリ)における資料調査を含めて、文献資料の収集を進めること、そして、その作業と並行して、内外の研究者と緊密な連絡をとりながら東北大学ベケット研究セミナーを立ち上げること、この二点が本研究の初年度の最重要の課題となる。

二年目となる平成 22 年度も、前年度に引き続き、資料収集とセミナーの開催を行う。世界のベケット研究の進展は著しく、アーカイヴで探索すべき資料も多岐に渡ることが予想されることから、前年度に引き続き、ベケット研究資料センター(英国・レディング大学)とフランス国立図書館(パリ)における継続的な資料調査が必要である。アーカイヴとしては、以上の二箇所が主要な場所であるが、これに加えて、ダブリンのトリニティ・カレッジにもベケット研究関連資料の一部が所蔵されており、その中には、特にマニユスクリヤ書簡類などの面で、レディング大学のベケット研究資料センターの資料を補足する役割を果たすような重要資料が含まれている。二年目以降の本研究では、この第三のアーカイヴについても、必要が生じた場合には、是非、出張調査を行いたい。他方、セミナーについては、前年度に継続して、ベケット批評の総括・各国受容論・作家間影響関係の三つをテーマ的な柱としつつ、より発展的なテーマも設定するなどして刺激的なプログラムを組み、年に二回の開催を確実に実行したい考えである。

三年目となる平成 23 年度も、継続して、資料収集(不足している資料の補充を中心的に進める)とセミナーの開催を行う。加えて、最終年度であることから、研究成果の出版の計画を進める。東北大学ベケット研究セミナーにおける研究発表の中から、特に重要な意義を持つと判断される研究を選んで、先にも触れたベケット研究の専門誌 *Samuel Beckett Today/Aujourd'hui* (Rodopi, Amsterdam/New York) への掲載の道を確認したい。研究成果の刊行については、そのほか、ミナール社のヌーヴォー・ロマン研究シリーズを統括している Johan Faerber (Université Paris-Sorbonne Nouvelle) との協力の道も平行的に探りたい。全体のタイトルとしては、例えば、《Renaissances beckettienes》といった本研究の総括的なテーマにふさわしいものが考えられるだろう。ベケット没後二十年のひとつのまとめと

なるような間文化的研究の成果として、国際的な評価に十分に耐える論集を刊行することを目指したい。

#### 4. 研究成果

初年度は、2011 年 2 月 15 日に東北大学にて、第 1 回ベケット・セミナーを開催した。フランス国際哲学コレージュ元校長であり現在パリ第 8 大学教授のフランソワ・ヌーデルマン氏がベケット作品における音楽性についての講演を、また、鈴木哲平氏(東京大学)とヴェロニック・ヴェドレンヌ氏(大阪大学)がベケットの演劇作品についての研究発表を行った。

プロジェクト 2 年目は、フランス国際哲学コレージュ元校長であり現在パリ第 8 大学教授のブリュノ・クレマン氏を講師に迎え、講演会と第 2 回ベケット・セミナーを開催。氏は、「レトリック」の観点から、「哲学者とは作家である」という仮定の上に立ち文学と哲学の関係についての研究を進めているが、2011 年 10 月 28 日に東北大学で行われた講演は、まさにこの文学と哲学の交差の問題 — ベケット作品を扱うにあたり非常に豊かな問題 — をめぐって展開された。日本語通訳付きの講演会は、専門分野を異にする学生や研究者が多数参加し、学際的なものとなった。また、10 月 30 日に東北大学東京分室で開催された第 2 回ベケット・セミナーの講演では、クレマン氏はベケットの小説『ワット』にレトリックの観点からアプローチし、いかなる点においてこの作品がその後の作品群に萌芽として含まれているかを示した。セミナーでは、ベケットの演劇作品『クラブ最後のテープ』を間テクスト性の観点から分析した藤原曜氏(関西学院大学)による研究発表も行われた。

なお、研究代表者は一年を通じてベケット研究専門誌 *Samuel Beckett Today/Aujourd'hui Filiations et Connexions* (2011 年刊行) の共同編集責任者として編集作業に携わる一方、前年同様、今年度の海外出張でもまたフランス国立図書館にてベケット批評における最新の研究成果の調査・収集を行い、それをふまえて主要図書を購入、東北大学フランス文学研究室におけるベケット研究関連の蔵書を充実させた。

最終年はベケット研究専門誌 *Samuel Beckett Today/Aujourd'hui* 創刊当初から編集委員を務めるアムステルダム大学教授(フランス文学)のマティス・エンゲルベルツ *Matthijs Engelberts* 氏を講師に迎え、2012 年 12 月 21 日に東北大学東京分室にて、第 3 回ベケットセミナーを開催。「Beckett: du côté de la France」と題された講演は、フランス人作家ジャン・コクトーとベケットの間テクスト性に着目し、アイルランド人であるベケットがなぜ外国語であるフランス語でも執筆することになったのかという問題をめぐって展開された。また、本年度は、日本サミュエル・ベケット研究会と連携し、「サミュエル・ベケットとフランス文化」というテーマを掲げ、国内外に研究発表を募

集、2012年12月22日青山学院大学を会場にフランス語シンポジウムを実現させたことは本プロジェクトの成果といえよう。研究代表者が司会を務め、エンゲルベルト氏も参加したフランス語シンポジウムでは、吉野修氏(筑波大学)、藤原曜氏(関西学院大学)、Jean-Baptiste Frossard氏(ソルボンヌ大学)が研究発表を行い、会場では発表者と参加者により活発な議論が繰り広げられた。また、海外出張先のフランス国立図書館およびサンジュヌスヴィエーヴ図書館での資料調査の成果としては、研究代表者はボルドー大学で開催された国際学会にて研究発表を行ったほか、論文2本が国際学術誌「Litterature」と「La Revue des Lettres Modernes, Serie Samuel Beckett」に掲載されたことが挙げられるだろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

① MEVEL YANN, Lire Beckett avec Starobinski, *Littérature*, 査読有, 167, 2012, 114-126.

② MEVEL YANN, L'Expérience beckettienne du visage: une ascèse ?, Samuel Beckett 2, sous la direction de L. Brown, *La Revue des Lettres Modernes, Série Samuel Beckett*, 査読有, 2012, 135-145.

③ MEVEL YANN, Être ou ne pas être écrivain ? Autour de *La Dernière Bande* de Samuel Beckett, *Impuissance(s) de la Littérature?*, 査読有, 2011, 321-331.

④ MEVEL YANN, *Dictionnaire Samuel Beckett*, sous la direction de Marie-Claude Hubert, Honoré Champion, 査読無, 2011, 159-163, 264-268, 373-374, 634-639, 718-722.

⑤ 島貫葉子, *Dictionnaire Samuel Beckett*, sous la direction de Marie-Claude Hubert, Honoré Champion, 査読無, 2011, 70-72.

⑥ 島貫葉子, *Oh les beaux jours*, de Samuel Beckett - Le personnage de Winnie et l'image de l'oiseau chanteur -, 国際シンポジウム成果報告論文集『女性・ヒロイン・社会 社会と時代の表象における女性像』, <http://ir.iwate-u.ac.jp/dspace/bitstream/10140/4219/1/asifhs-p71-80.pdf>, 査読無, 2011, 71-80.

[学会発表] (計3件)

① MEVEL YANN, Samuel Beckett : pourquoi la poésie ?, colloque franco-japonais *Soi disant. Poésie et empêchement*, 2012年9月12日, Université Bordeaux 3 (France).

② 島貫葉子, Lyrisme et espace dans *L'Innommable*, Journée d'études doctorales sur Samuel Beckett, 2012年5月24日, Université Paris VII (France).

③ 島貫葉子, サミュエル・ベケットの演劇作品に

おける女性のイメージ, 国際シンポジウム「女性・ヒロイン・社会」, 2010年9月5日, 岩手大学.

[図書] (計1件)

① MEVEL YANN, D. Rabaté et S. Hoppermans (éd), *Filiations et connexions/Filiations & Connecting Lines, Samuel Beckett Today/Aujourd'hui*, Rodopi, 2011, 436pp, 編著.

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

○取得状況 (計0件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

メヴェル ヤン (MEVEL YANN)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号 : 90431486

##### (2) 研究分担者

島貫 葉子 (SHIMANUKI YOKO)

東北大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号 : 60547389

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号 :